京都建築事務所　想いをカタチに、想い以上の感動を

私たちは、医療福祉施設を中心に設計を行っています。クライアントの想いを叶え、それが社会貢献につながる設計を目指しています。

医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

株式会社　京都建築事務所
代表取締役社長　細見 建司

〒604-8083 京都市中京区三条通柳馬場東入中之町 10 番地
TEL:075-211-7277　FAX:075-211-7270
http://www.kyoto-archi.co.jp/

【電子書籍】紀要「総合社会福祉研究」

発刊！第 53 号●特集　ケアを社会の柱に！平和を社会の基礎に！

〜いまこそ、世代も分野も超えて〜

当該号では、2022 年８月におこなわれた、第 27 回社会福祉研究交流集会 in 愛知の内容を収録しています。生産性や効率化がもとめられる社会において、ケアを社会の中心に据えるためには、どうすればよいのか。高齢、障害、保育の現場からの報告と、竹端寛氏（兵庫県立大学）による基調講演をあますところなく収録。ケアを中心とした社会への転換について迫ります。

〈海外情報〉フランスの子育て在宅支援を担う人材とその育成　安發　明子
〈時事評論〉
鈴鹿市自動車保有禁止事例　芦葉　甫
障害者権利条約の総括所見をどう読むか　佐藤　久夫　ほか

総合社会福祉研究所　TEL06-6779-4894　FAX06-6779-4895
ホームページ：http://www.sosyaken.jp/　E-mail：mail@sosyaken.jp
※研究所のホームページより、どなたでも無料でダウンロードできます★

～この春、入職される新人のみなさんへ～

福祉の世界へようこそ!!

「春から福祉現場に入職する学生さん」として、過去に本誌に登場いただいた方たちが、いまも現場でがんばっておられます。そんな先輩職員さんから、この春入職されるみなさんへ、写真とメッセージを寄せていただきました。

津田ひな子さん（医療ソーシャルワーカー・2022年４月号登場）

私の仕事のやりがいは、患者さんから「この病院に来てよかった」と言っていただくことです。患者さん・ご家族のなかには、さまざまな不安や思いをもって入院される方も多くおられます。入院時から患者さん・ご家族と顔見知りになり、この人に相談すればいいんだと思ってもらえる心のよりどころのひとつになればいいなと思い、早期からかかわらせていただいています。

新入職員のみなさんは、楽しみな気持ち・不安な気持ちなどさまざまな気持ちを抱えておられると思います。相手のために自分はどのような存在でありたいかを常に考えて行動することで、かならず相手に伝わることがあると思います。一緒にがんばっていきましょう。

川北楓子さん（グループホーム支援員・2020年４月号登場）

入職前は不安なことがたくさんあるかと思います。入職当初の私も不安な気持ちでいっぱいで、日々の業務をこなすだけで精一杯の毎日でした。ですが、「あせらず自分のペースでできることを確実に増やす」ことを大切にし、利用者さんのニーズに添った支援をていねいにおこなうことを心がけて、業務にあたっていました。また、何でも相談できる先輩や、いつも気にかけてくださる上司に恵まれ、少しずつ成長することができました。

入職して３年になりますが、今も当時の気持ちと変わらず、自分にできることを日々模索し、プラスアルファを付け足して業務にあたることを心がけています。みなさんも、あせらず、自分のペースで利用者さんとのかかわりを楽しんでください。そして、困ったとき、悩んだとき、遠慮せず先輩や上司にどんどん相談することをおすすめします。一緒にがんばりましょう！

鯉沼菜々さん（知的障害者入所施設支援員・2022年4月号登場）

入職後、なかまやご家族とのかかわりのなかで、当事者の声を社会に発信し、権利を勝ちとってきたそのうえに今の施設があることを実感しました。現在は、私たちの活動が福祉全体、社会全体をゆたかにすると確信しながら、日々の業務にやりがいを感じています。この１年間、なかま一人ひとりを深く理解し、個々の特性に合わせた支援を展開するために、なかまに対して抱いた印象やようすを言語化することを意識してきました。多くの人から学ばせていただき、時には助けられ、実りのある１年だったと思います。

これから社会に出て働くみなさんには、心と体を大切にしてほしいと思います。つらい時にはまわりに相談し、時には逃げてもいい。それは自己中心的な考えではありません。今後も初心を忘れずに、障害をもっている方とともに生きる「仲間」として、支え合っていきたいと考えています。

松浦志留玖（しるく）さん（介護老人保健施設職員・2022年4月号登場）

就職して１年が経ちました。学生時代、教室では学んでも実習やボランティアでは体験しなかった介護老人保健施設です。リアルな体験の連続でした。１年間つづけてこられたことに、自分が一番おどろいています。やめようとは思いませんでしたが、壁にぶつかることはありました。配属されたフロアはかならず新人が配属されるところで、わからないことや悩みをじっくり聞いてくれる雰囲気があります。また、プリセプターというスーパーバイザーがついてくれて、つづけてこられたのは、これらのおかげかなと思います。

実習で後輩がやってきて、１年前の自分を思い出しました。そして今、先輩として働いていることが不思議な感覚でした。実習生は先輩である私にいろいろ聞いてくれました。先輩職員として教えられていることがとてもうれしく思いました。去年、本誌では「あなたで良かったと言われる介護士になりたい」と書きましたが、それはまだまだです。

福祉のひろば

2023年4月号

【ひろばトーク】
女性運動を通して考える「政治的なもの」　元橋　利恵　6

●特集●　福祉を担い、守る人たちへ

保育士さんが生き生きと働きつづけられる環境を一緒に　奥山　千佳　10
尊厳を守りながら、最期まで寄り添う介護の仕事　松村　啓一　14
かけがえのない命を大切にし、その命を輝かそう　新井たかね　18
喜びの春　みんなでつながり語り合う保育　福井　茂　22
多様性が発揮される魅力ある職場づくりを　長友　薫輝　24
永遠に生きるかのように学べ　須田　英男　26

●トピックス●

「女性の困難」に実効性ある新法に　30
第28回社会福祉研究交流集会 着々と！　31
生活困窮者支援の現場から（Ⅱ）住まいの貧困を考える　藤原　望　32
9000円アップしてなくない⁉
～福祉労働者の処遇改善に関する実態調査から～　高倉　弘士　36

●連載●

ＷＯＲＫ ＷＯＲＫ――わくワク――
なかまの自立・やりがいにつながる焼き菓子づくり　おおぞら園　44
★新連載★婦人保護事業のこれまでとこれから
婦人保護事業と困難女性支援法　丸山　里美　46
ケア労働処遇改善キャンペーン！⑨
「労働基準法」も守れない「介護保険」は違法‼　佐藤　昌子　50
夕映えのとき～人生の終え方を支える実践～
特養ホームとマイホーム　小林　浩司　52
座ることを考える
生活の質を大きく左右する「車いす」のあり方①　増澤　髙志　56
ＪＯＢ＆ＡＣＴＩＯＮ　全国福祉保育労働組合（25）
愛知から広がる「子どもたちにもう１人保育士を！」　60
私の履歴書　社会福祉経営全国会議（25）
右往左往しながらの９年間　垣内　国光　62
阿修羅がゆく　わたしが好きな釜ヶ崎（45）　水野阿修羅　64
相談室の窓から
放課後保障の運動と実践の歴史に思いをよせて　青木　道忠　66
育つ風景　雪国の保育の完全装備　清水　玲子　68
映画案内　『コーダ　あいのうた』　吉村　英夫　70
現代の貧困を訪ねて
釜ヶ崎で続く真冬の路上死　生田　武志　72
似らすとれーしょん道場　似顔絵まんがアート
似顔絵「福笑い」解答編じゃ！　ラッキー植松　74
ホームレスから日本を見れば　ありむら潜　76
花咲け！　男やもめ　川口モトコ　77

みんなのポスト　42／福祉の動き　78／今月の本棚　81
●グラビア●　福祉の世界へようこそ！

●表紙の絵●
神門やす子

ひろばトーク

女性運動を通して考える「政治的なもの」

大阪大学大学院人間科学研究科招へい研究員　元橋　利恵

私は、兵庫県のニュータウンで典型的なサラリーマン家庭で育ちました。子どものときには「世界とつながれていない」という感覚をつねにもっていました。大学に進学してからも、モヤモヤぐるぐるとものを考えていても、自分の違和感を整然と説明したり、論理的に話したりするということができず、また感情が高ぶるとすぐに涙がでてきたりと、自分はチグハグな存在であり、政治的なことにかかわるのに自分は相応（ふさわ）しくないという感覚をもっていました。

大学院ではじめて、ジェンダー論という分野と出合いました。そこでは、自分がこれまで感じてきた違和感が説明されているだけでなく、なぜ自分が「世界」とつながれてこなかったのか、構造的に解明されていました。それは、初めて世界に輪郭ができたような感覚でした。とくに、フェミニズム運動の「個人的なことは政治的」というスローガンは、自分がくだらない、わがままだと蓋をしてきた違和感こそが、社会的政治的な問題につながっているのだと認識させてくれました。

二〇一一年、東日本大震災によって福島原発事故がおこり、市民による脱原発の抗議行動や反政府デモが頻繁におこなわれるようになりました。私自身もそのような路上での抗議活動にはじめて、おそるおそる参加するという経験をしました。そのようななか、二〇一五年に安保関連法（平和安全法制）に反対するアクションとして、全国に広がったのが「安保関連法に反対するママの会」でした。ですが、いまだ女性が政治的な発言をおこなうハードルが高いなか、「ママ」「母」という主語で政治活動をおこなう「ママ

もとはし　りえ

1987年、大阪府生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士課程卒業。博士（人間科学）。専攻は家族社会学・ジェンダー論。著書に『母性の抑圧と抵抗――ケアの倫理を通して考える戦略的母性主義』（晃洋書房、2021年）。

の会」は、ジェンダー論研究者からは性別役割分業を乗り越えられていない活動とみなされている印象をもちました。さらにはネット上では、「ママの会」に対するバッシングが渦巻いていました。そのような状況のなか、いま自分が「ママの会」をきちんと取り上げたいと強く思ったことが調査研究をはじめたきっかけでした。

「ママの会」からみえてきた「政治的であること」、それは、彼女たちの日常の母親業の経験、子どもと自身の母親業を大切に思い、そのことを言葉にしていくこと、それが聞き届けられ、彼女たちがエンパワメントされるということでした。政治活動というと、とても特殊な人がすることと思われがちですが、彼女たちの語りからは、本来は、「政治」は私たちの外部にあるのではなく、日々のケアへの関心や実践に宿るもの、さらには、私たちが社会的な不正義や理不尽な構造に立ち向かっていくためには、自身の話をし、それが聞き届けられ、尊厳を獲得していくという集団的な営みが不可欠であることがみえてきました。これらは、私もふくめ現代を生きる人にとってはなかなか得ることがむずかしい関係性です。

今後は、引き続き、私たち、ケアする人が中心になれるような政治のかたち、政治的なものの概念を考えていきたいと思っています。「世界とつながれていない」「自分には相応しくない」という感覚をもっている女性たち、私の身近な大切な人たちに届くような研究をめざして邁進したいと考えています。

特集

福祉を担い、守る人たちへ

～家族・先ぱい職員からのエール～

この春、長女が六年間通った保育園を卒園します。園外一泊保育、運動会、生活発表会と、保育園最後の大きな行事を終えるたびに、今までいちばん娘が成長しているように感じます。それぞれの行事での年長さんの役割も大きいと同時に、娘自身、ずっとあこがれてきた〝年長さんの姿〟に自分がなることができて、一つひとつ、大きな自信をつけていっているのだと思います。

保育園の先生方には、本当に感謝してもしきれない思いです。今号の特集でも保育園保護者の方がつづってくださっていますが、はじめての子育て、仕事と子育ての両立にすべてが手探りのなか、共感し、はげまし、娘の成長を一緒によろこんでくれた保育園や先生方には、「一緒に子育てをしてもらった」という思いでいっぱいです。

人生で最初のとっても大切な六年間をこの保育園で過ごすことができてよかったと感じると同時に、すべての親がそうした思いをもてる社会であってほしいと強く思います。どの保育園や幼稚園に行っても、等しく子どもの命と安全、人権が守られ、一人ひとりの子どもに寄り添った、ゆたかな保育実践や集団のなかでの育ち合いが保障される。そうした保育や教育が、すべての子どもに保障されるべきだと感じます。

それは、障害分野や高齢分野も同じであり、それが社会保障のあるべき姿ではないでしょうか。

ゆたかな福祉実践をくり広げ、積み重ね、専門性を高めていくためには、福祉にはたらく人たちが大切にされ、評価され、専門性を磨いていける環境が保障されることが不可欠です。今号の特集で、佛教大学の長友薫輝さんが、「人間相手の仕事が評価されない社会は、人間が大事にされない社会である」という社会医学者の言葉を紹介しています。その通りだと思います。

戦争できる国づくりを国民に何の説明もなく進めようとするいまの日本の政治は、まさに「人間が大事にされない社会」に突き進もうとしていると言えます。そうした社会に突き進んでいくことを許さず、人間が大切にされる社会をめざしていくことと、人間相手の仕事が評価される社会をめざしていくことは、同一線上にあるのだと思います。

人間相手の仕事、福祉労働、ケア労働が大事にされる社会は、「人間が大事にされる社会」につながる。この思いを社会全体のなかでもっと共有していくことをめざして、今号の特集では、福祉を利用する家族や先輩職員、教員から、福祉を担い、守る人たちへのエールを寄せていただきました。

ゆたかな福祉実践・保育実践に出会った人たちは、その出会いが人生をゆたかにしてくれること、人間が大事にされることの大切さを、身をもって感じていると思います。その共感を、この春も大きく広げていきたいと願っています。

（編集主任　中佳弥）